津田梅子の生き方（3）～女子留学生達～

皇后謁見のために参内した日本初の女子留学生達
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

岩倉使節団とともに派遣されることになった女子留学生に選ばれたのは、右の写真の 5 人の少女でした。

左から 1 番目　　上田悌子（満 16 歳）
左から 2 番目　　山川捨松（満 11 歳）
左から 3 番目　　永井繁子（満 10 歳）
左から 4 番目　　津田梅子（満 6 歳、最年少）
左から 5 番目　　吉益亮子（満 14 歳）

この中で、山川捨松は会津若松の生まれで、代々会津藩に仕えた武家の出身でした。父は捨松が生まれる前に他界していたため、捨松は、母親と祖父に養育されました。1868 年には、8 歳という年齢で母や姉たちと鶴ヶ城に籠城し、凄惨な落城を経験します。会津戦争後、山川家は経済的にも困窮しましたが、母・唐衣は子ども達の教育を重視していました。捨松の長兄の山川大蔵（後の高等師範学校校長）、次兄の山川健次郎（後の東京帝国大学総長）は、後に教育界で功績を残した歴史的な人物であり、特に健次郎は捨松よりも約 10 ヶ月早く渡米して、1871 年にはイェール大学で学んでいます。なお、捨松の幼名は咲子でしたが、母の唐衣は「この末娘を捨てたつもりで生きながらも、我が子が学問を成就し、無事に帰国することを待つ」という思いを込めて、米国に送り出す前に改名したのです。

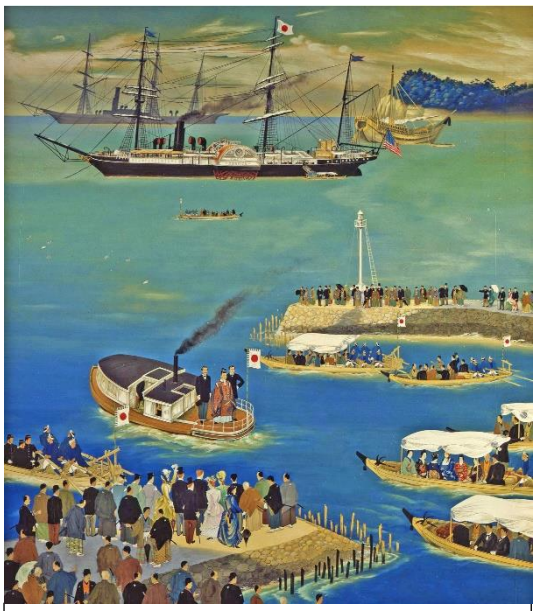
また、留学生の一人である永井繁子は、1861 年に江戸本郷猿飴町で生まれました。父の益田鷹之助（後の孝義）は、函館奉行所支配調下役でした。女子の養育を案じた父は、軍医の永井玄栄のところに 5 歳の繁子を養女に出しました。兄の益田徳之進（後の孝）は、タウンゼント・ハリスが日本滞在中だった 1856 年、幕府に命じられてアメリカ公使館に勤めた経験もある開明的な人物でした。明治時代になると実業家として草創期の日本経済を動かし、三井財閥を支えて、日本経済新聞の前身である中外物価新報を創刊しています。開拓使による女子留学生の募集があった時には、この孝が妹・繁子の留学を強く願い、繁子の養父・玄栄に理解を求めたのでした。

梅子も含めて、この 3 人の女子留学生にはいくつかの共通点があります。

第 1 に、開拓使の女子留学生募集に応募するきっかけをつくり、決断したのが、本人の父親や兄であった点です。

第 2 に、留学を強く勧めた父や兄達には、欧米への渡航経験があったことです。先に記したとおり、梅子の父・仙は、1867 年に半年間の渡米経験がありました。捨松の次兄・健次郎は、1871 年には開拓使の留学生としてアメリカに滞在中でしたし、長兄の大蔵は 1866 年～1867 年に使節団の随員としてロシアやヨーロッパ諸国を視察した経験がありました。繁子の父も、実は長兄の孝とともに 1863 年の使節団に随行して、ヨーロッパ諸国を歴訪する機会があったのです。

第 3 に、3 人の少女たちの家族は、いずれも旧幕府側の武士出身である点です。すなわち、明治維新という社会の大変動によって、父や兄の社会的地位が著しく不安定になったという背景があります。その一方で、彼らが出身藩において教育を受けており、欧米の事情通であることが強みとなり、新政府でも官吏としてそれぞれの任務につくことができていた点も見過ごせません。当時、幼少の少女が家族と離れてアメリカに留学すること自体が前代未聞でしたし、日本人の少女達が 10 年もアメリカで過ごしたらどのような結果になるのか全くの未知数でした。送り出す家族の側では、リスクがあることを承知しながらも、それ以上に、自らの子女がアメリカで教育を受けることによって、本人はもちろん家族にとっても大きな利点がある、という時勢を読んだ判断ができたのでしょう。



山口蓬春作「岩倉大使欧米派遣」
【提供】聖徳記念絵画館

5 人の留学生は、東京を発つ前日の明治 4(1871)年 12 月 20 日、宮中に参内しました。皇后陛下から、女子留学生達に渡された「皇后沙汰書」には、無事に帰国したあかつきには、日本の女性達の模範となるべく、日夜、勉学に励んで来るように、という内容が記されていました。1 番年上の吉益亮子が代表であいさつをしました。餞別として、紋ちりめん、お菓子一折が下賜されました。さらに 5 人には、新政府から「洋行心得書」を渡されました。そして翌日には、港のある横浜に向かいました。

遣米欧使節団は、岩倉を全権大使として、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳を筆頭に、38 人の男子留学生と梅子ら女子留学生 5 人も加えると、計 107 人という大所帯でした。横浜で梅子らを見送る群衆の中には、5 人の留学生を憐れむような目で見る人達もいました。あんな小さな女の子をアメリカに行かせるなんて、なんと冷血な親だろうと。これが当時の一般的な感覚だったのです。梅子は、仙から渡されたアメリカ製の赤いショールと、「英語入門書」「英和小辞典」の 2 冊を持って、12 月 23 日、アメリカ号（4,500 トン）という大きな船で横浜を出港しました。